IS〈インフィニット・ストラトス〉　超兵でイレギュラー

blood socerar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　超兵でイレギュラー

【Ｎコード】
Ｎ１３２９Ｙ

【作者名】
ｂｌｏｏｄ　ｓｏｃｅｒａｒ

【あらすじ】
女性にしか扱えないＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の操縦者を育成するためのＩＳ学園。そこに入学した『世界で唯一ＩＳを使える男』である織斑一夏。しかし、そこにはもう一人の男子・神田志明がいた……。これはそんなＩＳ学園で繰り広げられる物語。駄文ではありますが、頑張っていきたいと思います。誤字脱字、ご指摘などあったらお願いします
※　タイトルを優柔不断なお人よしから変更しました

第０話　主人公紹介（前書き）

これが初めての投稿になります。　いろいろあると思いますがよろしくお願いします。

第０話　主人公紹介

主人公設定

神田（カンダ）　志明（シメイ）

年齢は一応１４歳。誕生日は３月３１日
身長１７７？　体重５８キロ
顔は転生前はやや中性的だったが今はそこそこいいらしい（もちろん女顔じゃない）
日本人らしい容姿でやや色白。

　次に補正について
まずはＩＳを使えること。どうやら神様がどうにかしてくれたらしい。
それに超兵らしい。実際に体動かしてすごかった。
転生前の記憶あり
原作知識　ややあり

　その他
脳量子波が使えるのでヴェーダ（量子型演算処理システム）も使用可能
ＩＳは００シリーズの機体すべて使用可能だが形態移行した時代までしか使用できない。

性格など
・甘い物好き
・お人よし

・性格からか人のうえに立とうとしない
・むかつくと性格が変わる
・趣味はスポーツ、読書、料理など多種多様

第０話　主人公紹介（後書き）

読んでくださりありがとうございます。　こんな駄文ですがよろしくお願いします。

更新は不定期なので次がいつかはわかりませんができるだけ早く更新するのでよろしくお願いします。

第1話　転生した場所は

「知らない天井だ…」、、、
いやネタじゃないですよ？　たしか　えーと　なんか思い出せないけど繁華街にいたはずなのに、なんでこんな廃ビルなんかにいるんだろう…
「んっ、やっと気づいたかい？」
　不意にそんな声が近くから聞こえた気がした。　あわてて僕は周りを見渡した。けれど、だれもいなかった。　仕方がないので僕はほかの人が見たら変人決定なんだけどとりあえず話してみることにした。
「あのー、すみませんがどなたでしょうか？　あとどこにいるんですか？」
僕の声はビルの中で響くだけで反応がなかった。
うーんもしかして空耳？　「今の時代はウサ耳だよっ☆」
　今のは違う、絶対に違う。さっきのと声がぜんぜん違う。
んっ、声が違うってことは空耳じゃない？
「だから今の時代はウｓ「きみは覚えていないのかい？」
「（なんか聞こえたけど）はい、何のことでしょう？　そのまえにどこからはなしてるんですか？」
「僕はティエリア・アーデ。きみのＩＳの自我機能、つまりＡＩだよ。　わざわざ声にだす必要は無いよ。言いたいことを思えば全部僕に伝わるから。　神田　志明君。」
　エー、それじゃプライバシーもなにもないじゃないですか。
にゅ？それよりティエリア？　ＩＳ？　　それっｔ
「　にゅ　ってなんだい？　まぁいいが、きみがおもっているとおり僕はガンダム００のティエリアで　ＩＳはインフィニット・ストラトスのことだよ。」
　えーとっそれはつまりなんですか　僕は世界の因果からはずれた

と？
「君が信じるかは自由だけど君は転生されたんだよ。立てこもり事件に巻き込まれて自分から　人質になる、って言ってほかの人たちを解放させてね、自分は警察の突入のときの銃撃戦でね、」
　思い出してきた、あのときは彼女とデートしていてバカみたいにヒーローぶってあんなことしたんだっけ。　思い出すと恥ずかしい・・・・・・
「それを見て面白がってこの世界に転生させた　、というのが神様（自称）からの伝言だ。」
今　自称　ってあったよな
「心配しないでくれ。僕が神、というものを信じていないからだ。」
　なるほど、　記憶ともあってるしどうやら本当らしい。ていうことは、
「僕には何らかの補正はないんですか？」
「切り替え早いんだね。　普通だったらこんなこと言ってもなかなか信じないだろうに。」
「過去の事実をいまさらどうこう言うつもりはありませんしこっちの世界はそれはそれで楽しそうですし」
「そうかい。では説明していこう。」

第０話を見てください

「大体わかりました。今は原作が始まるときより少しまえなんですね」
「今日は３月１１日だからそうなるね。ＩＳはまだ最適化していないからまだＯガンダムしか使用できない。」
「じゃぁ、とりあえずここからでましょうか」

僕はそういいながら階段を降りようとしてため息が出た。
僕がいた部屋の反対側の部屋に２機のＩＳとやりすぎだろっと思うほど拘束された男の子をみてしまったからだ。

第1話　転生した場所は（後書き）

感想等よろしくお願いします

第2話　初めての実戦（前書き）

まだまだ本編ははじまりません

第2話　初めての実戦

うん、まず落ち着こう。　　大体の状況は分かった。
そんなこと言っても分かったのは誘拐されているのが日本人で１０歳ぐらいということ　と、その周りにいるＩＳが打鉄２機ということだ。
「ティエリア、打鉄って日本以外で使う国ってどのくらいありますか？」
「学園等の訓練機だったらおいてある箇所は何個もあるけれど、制式採用されてるのは日本を含めて２か国だけだね。」
うーん、そうなるとあれは日本ということなんだろうな
「ティエリア、０ガンダムをいつでも展開できるようにしといてください」

「了解、武器は両手にビームサーベルでいいかな？　あと、敬語で話すのはやめてくれないか？　僕はきみのＩＳの一部であるのだから。」

「武器はそれで　念のためにシールドもお願いします。　敬語のことはできるだけしないようにします。　けど僕はＩＳを道具とかそういうものではなく運命共同体みたいと思っていますよ　それに僕の今の状況を知っているのもあなただけですから」

「そうかい、それでこれからどうするんだい？」
打鉄２機だけなら簡単にことがすみそうなんだけど…　問題はあの男の子なんだよなー　こっちは射撃系の武器を使わなければいい話なんだが、問題はあっちが盾替わりに使われたらこっちからはどうすることもできない。

なんか隙ができないかな　とか考えてたら下の方から
ドゥゥゥゥゥーーーーン！！
突然の爆音に２機のＩＳも動揺を隠せずにいた。
「ティエリア、０ガンダム起動　２機のＩＳを破壊する」
僕は一直線に最高速度で突っ込んでいった。

「「なんだ、貴さｍ「ベキッ」　」」
何とか隙をついて一発で沈めたけどビームサーベルの威力　高すぎだろ（ハァ）
「志明、最適化（フィッティング）が完了した。これで第三世代型までの機体をしようできる。　あとこの機体の総称を決めたいのだが…」

「あぁ、ティエリア　ありがとう　機体名は……　そうだな　ソレイユにしようフランス語で太陽の意味だからいいじゃないかな　あとでいいからこの機体にリミッターをかけといてくれない？　じゃないと下手すると絶対防御をつらぬくかもしれない」

「了解した。　その男の子を解放しなくていいのかい？」
すっかり忘れてた（汗）　僕はティエリアに言われたとおりに男の子を拘束していたロープやらなんやらを全部引きちぎった　（ＩＳのパワーってはんぱないね……）
僕はＩＳの展開を解除して男の子に話しかけた
「だいじょうｂ「その子から離れなさい！！」
その声に反応して振り向いた瞬間僕の体は吹っ飛んでいた

第2話　初めての実戦（後書き）

早く8巻でないかな

オリジナル機体を考えていただいたらうれしいです

よろしくお願いします

第3話　学園最強との出会い（前書き）

前話にも書きましたがオリジナル機体を考えてくれたらうれしいです
ではどうぞ

第3話　学園最強との出会い

実をいうとほとんどダメージはなかった　ＩＳの本来の機能である操縦者保護機能？　で爆風を無効化し部分展開により衝撃を相殺した

けれど　僕は厄介ごとに巻き込まれそうだったので伸びたふりをしていた

（でも、いまのはいったいなんだったんだろう？）

僕はさりげなくハイパーセンサーを使って吹き飛ばしと思えるＩＳを見てみるとそこには青い髪のミステリアス・レイディ【霧纏の淑女】を展開していた、

更識楯無の姿だった

不覚にも一瞬ドキッ　としてしまった

そんなことも知らない彼女は周りも気にせずに男の子をギューと抱きしめていた　あぁー　うらやｍ　ンンッ

じゃなくてそろそろ解放してあげないと男の子が窒息してしまう

楯無さんの豊満の……で

「おねーちゃん　くるしいからはなしてよ」

「むー　そうそうどうやって縄をといたの？」

「それはね　あのおにーちゃんがたすけて……

「志明、何を考えているんだ「別に僕はなにｍ」　んっ、左上方にアンノーンのラファール・リヴァイヴを確認。　おそらくさっきの残党だ。」

「ちっ、　エクシア、部分展開　ＧＮタガー展開　　ミステリアス・レイディの操縦者　その子を守れ」

「エッ　のびてたんじゃ「早く」　つっ、わかったわ」

「クソッ、死ねー　クソッタレが」

残党が　５５口径アサルトライフル　ヴェントを展開して男の子に向かって乱射してきた

「これでもくらっとけ」

「えっ、何で男なんかがＩＳを使えｒ「ぐさっ」　グフッ…」

リヴァイヴは操縦者もろとも落ちていって一階の床にぶつかり「べきっ」

なんかへんな音がしたけど僕は気にしない、　気にしない

「えーと、　ありがとねこの子を助けてくれて、　　それにごめんなさい（ペコッ）

いきなり攻撃してしまって」

「いえ、　たまたま通りかかったので助けただけなのでお礼を言われるようなことは　　それに頭を上げてください　攻撃も全部防ぎましたし…」

そういうと楯無さんはバツが悪そうにしながら頭を上げた　　その時の苦笑いのような顔を見てまた僕は……　　なんでもない

なんでもない　決してその顔が見れてうれしいとかそうではない…

どうやらぼくは結構Ｓなのかもしれない　自重しないと大変だな

「じゃぁ　この子を連れて降りましょう　下に迎えを用意させてあ

るしね」
　そういうと楯無さんは男の子を連れて降りようとしていた
えーと　このＩＳ放置でいいのかなー　とか考えていたら
「ほっといていいわよ　すぐに回収部隊がやってくｒ「お嬢様」あっ　虚ちゃん　よろしくね♪」
　虚さんだ、　学校外でもきちっとしてるんだ　　虚さんにお辞儀をされたのでこっちもしかえしてから一階に下りて行った

外に出てみるとあきらかにボディーガードって自己主張している男が２０人近く囲っていた
　さすがに少し戸惑っていた　楯無さんの家系はたしか隠密系？だった気がするが　とかおもっていると
「じゃぁ　この子お願いします」
　と言って楯無さんがボディーガードに引き渡すと男の子は手を振りながら車でここを立ち去って行った

「「ふぅ…」」
　思わずため息をつくと楯無さんもついていた
「ふっ、あらためてありがとね　おかげで助かったわ」

「いえ　こちらこそ　　あの男の子はいったいなんなんですか？　護衛がすごかったですし　警察もいないとなると」

「あー、　あの子はね今の内閣総理大臣の孫なのよ　上も表ざたにしたくなくて私のところにまわってきたの

自己紹介がまだだったわね　私は更識楯無　あなたは？」

「結構ＶＩＰだったんですか…　あぁ、すみません　僕は神田志明です　あなたはいったい？」

彼女は含み笑いをして

「私はただのＩＳ学園最強よ♪」

これが学園最強との出会いだった

第3話　学園最強との出会い（後書き）

ウイイレ　買ったらはまってしまった

第４話　事後処理（前書き）

ほとんど内容がないです

第４話　事後処理

「で、あなたは何者なのかしら？」

「何者、　といいますと？」

「だって　あなた男の子なのにＩＳを動かせてるし　そもそもなんであんなところにいたの？　　あんな場所ふつう誰も来ないのに…とういうかあなたはなんなの？」

楯無さんの声は普通だったが　顔つきは変わっていた

「ふぅー　　僕は神田志明ですよ？　それに楯無さんとは僕の過去を話せるほど仲良くなっていませんしね　　さっきの質問に答えられるとこを話すと

どうしてＩＳを動かせるかはわかりません　このＩＳはある人から貰いました　あんなところにいたのは寝床がないからですよ

　　といったところでしょうか」

すると盾無さんは考え込んでいるようで数十秒待っていると

「じゃぁ　家にに来ない？　　あなたのことをもっと知りたいしあなたのことも調べないといけないしね　　それにあぶないよ？ＩＳに乗れる男の子は今　世界中にあなたをのぞいたら一人しかいない　　彼はまだバックアップが整っているけどあなたにはない　　いいと思うけど？」

「そうやって誘っていただけるのはありがたいんですがどうしてそこまで僕によくしてくれるんですか？」

「お姉さんが男の子のことが好きだから、　じゃダメ？」

はぁ　この人にはかなわない

「では　お言葉に甘えさせていただいてお世話になります」

「むぅー　そんな堅苦しくなくていいのに……　もっとフレンドリーにいこうよ　そうだ　そうだ　あなたのＩＳの機体名ってなに？」

「これが僕なんですよ　僕のＩＳ名は　ソレイユ　フランス語で　太陽　という意味です」

「ふーん　じゃぁ　いきましょうか？」

そういうと楯無さんは坂を下って行き僕もそれについて行った

３０分後

目の前には昔の趣の豪邸が広がっていた

「これが私の家よ　「す、すごいですね」　ふふ、　じゃついてきて」

「ちょ、ちょっと待ってくだｓ「ただいまー　いま帰ったわー」い」

そういって楯無さんは門をくぐっていった

僕は門をくぐりながら思った

「これから　大変だな」　と

第４話　事後処理（後書き）

すみません

第5話　初めての楯無さんのお家

前回までの復習

転生したとおもったら首相の孫の誘拐事件に遭遇

無事解決したら楯無さんに誘われて今　楯無さんの玄関の前…

「私の家にご招待～　、の前に質問がひとつ　あなたのＩＳの待機状態はなんなの？」

「（まぁ　いつか知られることだしな）　ソレイユの待機状態はこのメガネですよ　だからこれは伊達じゃなくてＩＳからの情報補佐とかしてくれる優れもの　なんです」

「（隠す気はないのかしら？）　ふ～ん　ありがとね　お礼にお姉さんからひとつご忠告　お母さんに気を付けて……ね」

楯無さんのお母さんか　原作にはまだ出てきてないからまったくわからないんだよな　てか　楯無さんが忠告するってどれだけ……（汗）

「わかりました……」

「「おかえりなさい　たっちゃん「姉さん」」

「ただいま、お母さん　簪ちゃん」

簪さん　さりげなく隠れないで　普通に傷つくから　　この人が楯無さんたちのお母さんか　　楯無さんにそっくりだな

「たっちゃん　　その方は？」

「えーとねー　なんというk「申し遅れました　お嬢様に拾われた神田志明といいます」　お嬢様はやめてよ」

「たっちゃん「はい…」　拾ったってそういう性癖だったの？　じゃそれなりに神田君（？）も覚悟しているのよね　「ちょっとお母さん？」　じゃちょっと小手調べね」

そういうと僕に突っ込んできた　　けどこのぐらいなら超兵の実力で

「志明、むやみに動くな。　彼女さっきから指を動かして周りに糸を引いている。　　彼女は曲弦師だ。」

ちっ　そういうことかよ

僕は前進しようとしていた体の動きを止め　さっきティエリアに頼んでおいた護身用の両刃剣（柄の部分に指一つ分入る穴あり）を展開して後ろに向かって思いっきりふって後ろに後退した

「へぇ　なかなかやるわね　　私の曲弦糸を避けるなんて　　それに暗器術？

じゃちょっと本気出そうかな」

まだこの人は気づいてないが簪さんは気づいているのかな？　剣を展開してから唖然　とした表情でこっちを見てくる　　てか楯無

さんはやく止めてよ

僕の願いが通じたのか

「お母さん　ストップ　この人は私の恋人じゃないわ　泊まる場所が無いみたいだから泊めてあげようとしてつれてきたの」

「でも　たっちゃん　彼暗器術使ったってことはそれほどの、ってことじゃないの？「お母さん、　その人が使ったのは暗器術じゃなくてＩＳの部分展開だよ」

でも簪ちゃん　ＩＳって女の人しか使えないんじゃ」

「だから連れてきたのよ　志明君の保護と情報収集のために」

「そう　わかったわ　　じゃ自己紹介ね　私はたっちゃんのお母さんの更識一姫　でこの子はたっちゃんの妹の簪ね　よろしく志明君」

簪さんはお辞儀をしたら奥に引っ込んでしまった　人見知りだったからな

「ははは…　ごめんなさいね「いえ」　そう　でもいいの？　情報収集するとなるとプライバシーなんてないわよ？」

「いえ　そこも了承していますので大丈夫です　改めまして　神田志明です　しばらくの間よろしくおねがいします」

この長そうな時間　実際にかかった時間約５分

ここの家の人って疲れさせる天才？

第5話　初めての楯無さんのお家（後書き）

結局　玄関前で終わってる（汗）

第６話　初めての楯無さんのお家　ｐａｒｔ２（前書き）

少しづつ長くかけるようになってきた

第６話　初めての楯無さんのお家　ｐａｒｔ２

玄関の件からから約一時間後

「じゃぁ　私は虚ちゃんから報告を受けてくるから少し待っててね」

「じゃ　私も夕ご飯の支度をしてくるわね」

楯無さんと一姫さんはそう言うと部屋を出て行った　ちなみに僕は一姫さんの曲弦糸に魅了されて今度教えてもらえることになった

「ティエリア　超強固のワイヤーを作っといてくれ　種類は２種類　切断力に優れたものと隠匿性に優れたものだ」

「了解した　頼まれていたリミッターの件だが武装の威力を３５％　推進系を４５％　エネルギーはほぼ無限だがシールドエネルギーは設定させてもらった」

「ありがとう　ティエリア　オートクチュールの方もよろしく頼む」

いまの会話は脳内で行われていました　なぜなら

「隠れてないで入ってきたら簪さん？」

「つっ、どうして・・・気づいたの？　私も・・・それなりにこの家の・・・訓練をうけてきたんだけど？」

まぁ　自分では気づいてなかったんだけど　簪さんもこの家の人間だから気配を消せるんだ　感心　感心？

「いえ　実はこのメガネ　ＩＳの待機状態でいろいろ情報をくれたりするんですよ」

「神田さん（？）・・・ＩＳ持ってるの？　できれば　見せてほしい」
簪さんってあまり初対面の人にはあまり話さないイメージだったけどＩＳとかメカ関係だと違うのかな
「ねぇ・・・聞いてる？」
簪さん　そんなに顔を近づかれると
「あ～　かーんちゃーん　意外とだいたーん」

「ほ、本音　違うから　ただ機体の情報を・・・見せてもらおうとしただけで…」
のほほんさんだ　やっぱり私服もこのスタイルなのか
「初めまして～　布仏　本音　です　よろしくね　しーくん」
しーくん　って初対面の人にもすぐあだ名ですか・・・
「こちらこそ初めまして　神田志明です　よろしく本音さん」

「ぶー　本音さん禁止だよ「じゃ　のほほんさんで」　ならオ～ケ～だよ
で　かんちゃん　機体の情報ってしーくんのＩＳ？」

「うん　神田さん　一部だけでもいいので　見せてくれませんか…？」
簪さんその上目づかい反則ですよ
「別にかまいませんがどんなのｇ「ミサイル系のシステムと推進系のシステムを」わ、わかりました」
じゃ　キュリオスの機体データでも見せてあげましょうか
「えーと　これですね」
そう　いいながらぼくはのほほんさんに借りたディスプレイにキュリオスのデータを出した
「ありがとう　これですこしははかどりそぅ…」

簪さんが見ているのは飛行形態のときのテールユニット（ミサイル）と全体の推進系のシステム　もともとのスペックだと大気圏突入も離脱もできるんだよな

簪さんとのほほんさんと議論していたらいつの間にか3時間後

「ありがとぅ　志明さん　参考になった」
そういうと簪さんは顔を赤らめながら部屋から出て行った　第一印象はわるくなかったかな？　のほほんさんは簪さんをいじりに追いかけて行った

「お久しぶりです　志明さん」
ふと呼びかけられて振り返るとそこには虚さんの姿があった
「ちゃんとした挨拶ははじめてでしたね　初めまして布仏虚さん？
神田志明です」

「こちらこそ初めまして　布仏虚です　私の名前をご存じだということは…」

「はい　すでにお話は聞いています　布仏家の役割も　妹の本音さんから「ちなみに本音は私のことをなんと？」　それは…秘密、ということで」

「そうですか　では直接本音に確かめます　間もなくご夕食の準備が終わりますので「お手伝いすることは」　いえ　客人にそんなことはさせられませんので　ゆっくりとくつろいでいてください」
そういうと虚さんは部屋を出て行った

それから１０分ほどで夕食となったが楯無さんと簪さんとの、ねがあるから少し空気が重かった。　けれどあとから楯無さん曰くいつもよりは上機嫌だったらしい　簪さん初期ステータスどんだけ低いの？

ちなみに二人のお父さんは仕事で基本家にいないらしい

そのあとお風呂にも入れさせてもらったけど普通家に露天風呂はなかなかないと思うけど…

ちなみに楯無さんが侵入してきたからあらかじめ設置していた冷水トラップで撃退したのは余談だったりしたりする

のんびり入っていたらのぼせそうになって上がったら浴衣が用意されていた

どうやらお父さんのらしい　まあ　似合うからいいんだが

僕は用意されてた部屋に行く途中ある部屋の襖があいていてそこを覗くと簪さんが戦隊ものを見ていたから一緒に見たりなぜか廊下でくたばっていたのほほんさんを部屋に運んだり一姫さんにお酒を注いだり　寝ようとしたらさっきの復讐のごとく布団に侵入を許したりそれを見つけた虚さんが楯無さんをひっぱっていったりしていたのも　もちろん余談である

こんな感じで転生1日目が終了　ちなみにいま午前3時……

ティエリア曰く「きみは優しいがSだな」らしい　自覚があるから否定できない……

第６話　初めての楯無さんのお家　ｐａｒｔ２（後書き）

感想やオリジナルＩＳの案とかを出していただけたら嬉しいです

第7話　ＩＳ学園入試（前書き）

日本シリーズ見てると進まない

第7話　ＩＳ学園入試

転生してから二週間が過ぎた
　この二週間にしたことは一姫さんに曲弦糸を教わり楯無さんからは古武術やらいろいろな武術を習い　簪、虚さん、のほほんさんからはＩＳの基本から整備の方法まで教わった
　ＩＳの起動訓練は実際にはできないのでティエリアとヴェーダの手伝いで擬似感覚で行った　ちなみに起動時間には含まれない
　簪とのほほんさんは一週間前ＩＳ学園に受験してきたらしい
やけに遅いなと思ったら他の国に少しでも合わせる　という措置らしい
　打鉄弐式はがんばって開発したので武器のシステム等を除いてか完成していたので　試験には打鉄の武器を量子変換（インストール）して受けたらしい
　ちなみに結果は惜敗だったらしい　のほほんさんはね・・・

んんっ、　えー僕はいま楯無さんと一緒にＩＳ学園へ車で向かっています
　楯無さんは僕のハロで遊んでいます　いつかこのことも書きますよ？
どうしてこういうことになったかと言うと
「志明くーん　ちょっと私と一緒にＩＳ学園まできてくれない？」
「どうしてです？　どちらかというと僕の存在は隠したいんですよね？」

「うん　そうだよ　　だから私が信用できる人にあってもらいたくてね」

と、言うことです　　で今僕はＩＳ学園にいます
　楯無さんによると待ち合わせしてるらしいですけど
「あっ、　織斑先生　こっちです」
　まさかの織斑先生　　この人ってブラコンなんだよな

「バッ「パシ」」

「ほう、なかなかやるな」

「し、白羽どり！！」

「いや　楯無さん　そんなネタみたいに言わなくても…」

「更識、こいつがおまえがいっていた神田志明か？」

「はい　僕が神田志明です　はじめまして織斑…「千冬だ」千冬さん」

「すまないが一応学園なのでな…「じゃ　織斑先生？」あぁ、すま

ない」

「では、神田　私についてきてくれ「えーと　これから何を…」
更識、もしかして話してないのか「はい…」　はぁ、では説明しよう」
楯無さん　ハロと遊んでいましたからね
ようするにソレイユの機体データを見ている間に今年のＩＳ学園の入試問題を解け　ということらしい
データ（一部）の方はハロに移してあり　楯無さんに任せられるので僕は試験を受けていた　この試験問題はアメリカにある天才を作るＥＲ３機関の卒業試験から抜粋してるらしい　まぁ　ほとんどヴェーダを使ってるから間違えてないだろうけど…　最後の方はテキトーだけどね

ひと段落してから実践データを見せろということで今楯無さんと対峙している

「どうしてこんなことに…」

「お姉―さん　頑張るからねっ」
そんなこと言いながらミステリアス・レイディに大型ランス　蒼流旋を展開している楯無さん　どうやら僕とやるのが楽しみみたい
「人のことを戦闘狂みたいにいわない」

「すみません　じゃ始めますか　ティエリア　ヴァーチェ展開
目標を
殲滅する」

「では　はじめ！！」

楯無さんとの初対戦が始まった

第8話　楯無さんとの初対戦（前書き）

レポートを書いていたら遅くなりました

第8話　楯無さんとの初対戦

僕は開始の合図と同時に後ろにワンステップ跳んでその状態でチャージしていたGNバズーカーを発射した
「くらえ！！」
　ズゥゥゥゥゥーン
「「なっ」」
僕と織斑先生の声が重なった　けれどこの声の意味は違った
　織斑先生のはGNバズーカーが放った砲撃でえぐられた地面を見て威力に驚いている
　けど僕のは違う　放った砲撃が楯無さんのいる方向とは全く違っていたからだ
「ちっ、蜃気楼……ですか」

「そう　よく初見で分かったわね」
　ようするに楯無さんは僕と自分の間にナノマシンで形成した極端な温度差を発生させて僕が視認した方向とはずれた場所にいた　ということだ
「でもネタがわかれば　（ティエリア　センサーに人体反応を追加　その誤差を計算してハイパーセンサーを修正してくれ）　」

「じゃぁ　今度はこっちの番ね」
そういうと楯無さんはガトリングガンやフンディングの欠片で怒涛の攻撃を仕掛けてくる　必死で回避していたがいつのまにか壁際まで追い詰められていた
「つっ　しまった「くらえっ♪」」
　僕はとっさにGNバズーカーを身代わりにしてガトリングガンの攻撃を防いだ　攻撃手段は減ったがそのかわりGNバズーカー用のエネルギーをGNフィールドに転用　その後防戦一方だっ

たがダメージは三割程度しか受けていない
「なかなか　じょうぶね…　どうしてエネルギー切れ起こさないのよ」
いや　楯無さん知ってるでしょ　　でも少しイラついてきたなら
「じゃ　いきますよ」
僕はＧＮフィールドの展開を解除してから接近戦に持ち込もうとしてＧＮキャノンを乱射しながらビームサーベルを展開して突っ込んでいく
「ふふふ　　引っかかったわね「まさかっ」接近戦は結構好・き・だよ」
そこは強調しなくても…　　この機体は接近戦は苦手だけど
「ティエリア　装甲をパージ　　ナドレを展開」

「了解。　志明それと（・・・・・・・・・・・・・・・）」

「わかった　もしかしたらためすかも」
楯無さんの行動は僕の予想範囲内だったので接触寸前で装甲をパージして後ろに下がってＧＮビームライフルを展開してパージされた装甲もろとも楯無さんに向かって撃った
「きゃぁ」
よしっ　直撃　　このまま接近戦に持ち込んで
「でも　あまいわよ」
しまった！！　　ならこの手で
「これで　終わりよ」

その瞬間ソレイユ（ナドレ）は光に包まれた

第8話　楯無さんとの初対戦（後書き）

フンディングの欠片は簡単に言うとミストルティンの槍の小型化兼燃費安定型みたいなものです

第9話　まさかの教員試験？（前書き）

遅くなりました

第9話　まさかの教員試験？

前回までのお話

いま対、楯無さんとの実技試験中

「「つっ　なに（んだ）？」」

「本当は　まだ出したくなかったんですが　しかたがないですね」
　僕はティエリアからさっき聞いた一次移行（ファーストシフト）を施行して機体をナドレからセラヴィーに変更　そのまま腕と　脚部にあるＧＮキャノンの隠し腕を使って楯無さんを捕まえた
「きゃぁ　ってこれってちょっとまずかったりする？」

「結構そうだったりしますよ　ティエリア　セラフィムで頼む」
　僕はセラヴィーを展開しているのでティエリアに頼んでセラフィムを分離
　そのままビームサーベルを展開して突き刺す
「「これで　終わりです（だ）」」
　はずなのに貫通・・・した？

「残念　わたしはこっちよ？」
まさかアクア・クリスタルで形成したダミーにひっかかるなんて・・・
一次移行の時に動作不良で人体反応が使えなくなってるとは
それに凍らせて固まっちゃたから動けないし
「これで終わりです、　だっけ？　「ぽちっ」」
押す真似しなくても…　そんなことを思いながら僕は熱き熱情（クリア・パッション）で吹き飛んでいた

「つっ、　逝ったー」

「志明君　漢字間違ってるわよ」

「え…？　あっ　でも実際爆死レベルですよね　あれは」

「否定できないのが残念ね」

「なかなかの操縦技術だったな、神田「いえ　それほどでも」　謙遜する必要は無い　ほとんどＩＳを動かしたことがないのに学園最強とここまで戦えたのはおそらくお前だけだろう」
稼働時間は少なくても仮想シュミレーションしてるからね…
「これで僕の試験は終わりですか？」

「いや、　それだがなさっきお前に受けてもらった試験だが　今年

の新一年の平均が６４点　最高でも９７点だったのだが　お前の点数が４００点中３２４点・・・だったのでな　　もう一つ教員用の試験を受けてもらおうと思ってな」
　ヴェーダ使ったら　超人みたいな結果になってるし　　楯無さんもそんなに驚かない　　てかここに来る人って相当成績いいはずじゃ……
「うっ、それって絶対ですか…？「もちろんだ」　はぁ、わかりました」

今度はヴェーダを使わずに自力で頑張った　簪さんとのほほんさんと虚さんの地獄のＩＳ講習のおかげでみっちり教え込まれたからな
「こっちのテストは１００点中７８点　　なかなかの点だがこれでは教員レベルとはいえないな」
　いやこれでだめなら教員どんだけ点取っているんだ？
「教員は最低９０点は取るぞ」
　こっちの心理をのぞかないで下さいよ…

「それで、学園側は神田を入学させる方向をとろうとしている。
　もちろん拒否権もあるから入学したくないなら断っても構わない」

「いえ　僕も学園側の意思に従います　　いつまでも楯無さんのお家に居候させてもらうのも悪いですし…」

「そうか、　では細かい個人情報を記入してほしいんだが「先生」
　どうした？更識　「実はまだ志明君のことがわかってないんです」
　なにっ、更識の力で分からないだと…」

「すみません　そのことは近いうちに話しますので今日のところは・・・」
もう夕方ですし
「それもそうか　　神田、実はお前に会わせたいバカがいるのだが…」
「別にかまいませんが「では明日の１０時にこの住所まで来てくれないか？」
わかりました　明日お伺いします」
「じゃぁ　志明君帰りましょうか」
「はい　わかりました　　ハロ　おいて行かれるなよ」
「リョウカイ　リョウカイ」
こうして僕たちは帰路についた
その頃事務室では
「ほんとに彼をそのような待遇で入学させるおつもりですか？」
「その方が面白そうじゃないですか」

こんな感じで勝手に話が進んでいるのは楯無さんは知ってたらしい
がこんなこと知る由もなかった

第9話　まさかの教員試験？（後書き）

そろそろテストなので更新が余計に遅れます

第１０話　織斑一夏との初対面（前書き）

ストックがなくなってきた

第１０話　織斑一夏との初対面

翌朝　僕は織斑先生のお家に伺うことになっていた
朝食をいただいてから徒歩で向かおうとしていた
ちなみに服はお父さんの服を借りている　お金がないから買いたくても何も買えない……
「じゃ　行ってきます」
そんなに大きな声で言ってないから気づかないと思うけど
「志明　もう行くの？」
赤ハロを連れた簪が見送りに来てくれた
「はい　駅３つ分ですから歩いて行こうかと」
「そうやって・・・気を使わない　こっちも・・・お世話になってる　だから」
「居候させてもらってるだけで十分ですし　じゃ　簪行ってきます」
「むぅ・・・　行ってらっしゃい」
お互いを呼び捨てで呼ぶようになったのは簪にハロをあげた時からだ
この話もいずれするだろう
少し道に迷いながら５０分ほどで指定された住所にたどり着いた

「ここであってるよな？　ティエリア」

「ああ、　ここのはずだ　　いま9時５０分だからちょうどいい時間ではないか？」

　予想していたのはマスコミがうろちょろしてるかな　とか思っていたが1か月もしたら特に張ってるという訳でもないらしい

「ピンポーン「はーい　いまでます」」

　警戒しなくていいの？

――がちゃ――

「えーと　どちら様？」

「近くに引っ越してきた神田志明と申します　ごあいさつにと…」

「あっ　ご親切にどうも　俺はお「織斑一夏　ですよね」　えっ？」

「今のは戯言ですよ　　少しは警戒心を持たないと　世界で唯一男性でＩＳを操縦できると公表されているんですから」

「俺に何の用だ？　ＩＳ関係ならお断りだが　　ていうかお前はなんだ？」

「僕は織斑千冬さんの知り合い　といったところでしょうか　　実は昨日ご招待されたのでそれで　　ということです　　ですから別に怪しい者じゃありません」

「そうか　すまない　じゃ　いま千冬姉呼んでくるから待っててくれ」

「はい　すみません　織斑さん」

「遅れてすまない　」

「いえ　まだ１０分前ですし　それに昨日は飲んだのでしょう「つっ」　そんなに驚かなくても　結構お酒のにおいがしますよ　千冬さん」

　そう言いながら　朝楯無さんから貰った消臭効果のあるガムを渡した

「すまないな　それにしてもイメージと違う服をきているな」

「まぁ　これはお借りしているものですから」

「そうなのか？　　まあ、いい　少し遠出することになるが大丈夫か？」

「すみません　実は「なんだ？」　いえその　僕お金　１円も持っていないんですよ」

「じゃ、　ここまでどうやって「実は徒歩で」　そうか　ならそのぐらい私が出そう「でも…」　気にするな　それに一夏に私がＩＳ学園に勤めていることを言わなかったようだし」

　ではお言葉に甘えて

こうして僕たちは2時間ほど電車に揺られ　ランチもご馳走になってからちょっとした山奥まで来ていた
「ここだ」
千冬さんがしめした場所は山小屋だった
「えっと千冬さん？」

「外見はあんな感じだがな、　付いてこい」
そういうと千冬さんは山小屋に入って床をぶち抜いた
「あの千冬さん…　器物損壊は……」

「違う、　この下にあるラボにあのバカがいる」
本当に下に階段が続いてる　こんなバカなことするのは束さんだけだろうな

2人は地下へ続く階段を下りて行った

第１１話　ソレスタルビーング始動（前書き）

駄文ですみません

第11話　ソレスタルビーング始動

「おい、　束　いるか？」
　やっぱり束さんか

ドドドドドドド

「　ち～～～ちゃぁ～～～～ん～～～　とうっ！」
　飛びつく束さんに　迎えうつ千冬さん　スルーしてもいいんだけど　束さんの脳が大変なことになるので
「アイアンクローはひどいですよ　千冬さん　束さんもいきなり飛びつかないでください…」
　あっ　束さんがほとんどの人間に興味無いの忘れてた……　あんまり原作出てこないし・・・　なんか変なこと言った？

「せっかくのちーちゃんとの久しぶりのハグを止めるなんて君はなんなんだい？　私が知ってる黒髪の子はいっくんしか知らな・・・・・・ちーちゃん　もしかしてこの子しーちゃん？」
　束さんって男性には君付けじゃなかったっけ？
「ああ、そうだ　彼が神田志明だ　しかしよくわかったな　彼の存在はほとんど知られていないはずなのだが」

「ちっ、ちっ、ちっ　ＩＳ学園程度のセキュリティーでこの私を止められるとでも　で、ちーちゃんどうして来たの？」

「神田のＩＳの本当の性能を調べてもらおうと思ってな・・・」
　そんなこと思っていたんですか
「（ティエリア　太陽炉とトランザムシステムについては全力で隠せ）」

「（了解した。　ヴェーダの全性能で隠し通す）」

「そういうことだったんですか　　じゃ　どうぞ」

ブラックボックスにしたのを確認してから僕はメガネを渡した

１０分後

「解析おわったよ　　しーちゃんのＩＳは私が作ったコアが使われてなくて拡張領域（バススロット）がほぼ無限にあるトンデモ商品だね

それと「ｐｉｐｉｐｉ」ちーちゃん　電話だよ」

「織斑だ「織斑先生ですか」　どうした更識？「実は志明君の情報がわかったので報告を」　わかった　報告しろ」

「ちーちゃん　私もしーちゃんの情報を教えてあげるよ」

「「しーちゃん（志明君）の国籍、戸籍は不明で　（ご）両親はすでに死亡してると思う（われる）　ＩＳは１４歳位のときに中東である人物から譲り受けた　だって（だそうです）」」

「報告　ありがとう　更識　　ではな」

「ちーちゃん　それにもう一つ　　情報が保管されてたのはペンタゴンだったよ」

ペンタゴンってティエリア頼んだけどまさかそんなとこに置くな

んて
「ふぅ、　では　神田　　今の情報は本当か？」
「はい　まったくもってその通りです　　僕にＩＳをくれた人がそんなとこに入れたんだと思います」
「そいつはだれだ？」
「そこまでは　わかりません　　ちなみに僕密入国者です」
　戯言だけどね…
「そうか　悪いことを聞いた　　ではそろそろかえｒ」
「ちーちゃん　ちょっとしーくん借りてくね」
「まあ　いいが　　じゃこれは帰りの通行費だ　　では新学期に学園で」
　そういうと千冬さんは僕に２０００円を渡して帰っていった

「じゃ　しーくん　バイトしない？」
「バイト　ですか？　　べつにかまいませんがどんな？」
「わたしのＩＳを変なことに使う輩を懲らしめて　ってやつだよ
　報酬も多いよ」
　確かにお金を稼げるのはいいかもな　　結構お世話になってるし
「わかりました　　ではいつからやればいいんですか？」

「えっとね　今日からかな　　実は長野にある研究所でコアをどうやったら強制的に暴走させられるかってやつがあって　　しーくんには　運び込まれるコアを奪ってきてほしいんだ」

「わかりました　じゃデータの転送をしといてください　　それといまから送るＩＳのデータの背中にあるエネルギー発生器を燃費を悪くしてもいいですから　隠せる設計にしといてください」

「んー　わかったよ　　じゃ　行ってらっしゃい」
　束さんはクレジットカードを渡しながらデータの転送とヤークトアルケーの擬似太陽炉の改造等に入っていった

「ティエリア　　オーバーフラッグ展開　　目標を奪取する」

フラッグを展開し飛行形態に変更しながら飛行中　　太陽炉搭載型ではないのでエネルギーに限りがあるが　センサー類は束さんさんがつぶしてくれたらしい
「志明、　ターゲットを捕捉」

「了解っ　じゃコアを奪いますか」
　僕はリニアライフル「トライデントストライカー」を展開　タイヤ付近に向かって連射する
「うわっ　なんだ　　ＩＳの襲撃だと！！　どこから漏れたんだ」

「あなたたちですよね　違法な研究を行おうとしているのは」
　　ちゃんと変声しています
「なんなんだ　おまえはっ」
　俺は俺だー　とか言いたいところだけど
「私はソレスタルビーング所属のラビット（笑）　ＩＳに関する違

法行為を断絶するために設立された組織の一員です　ではコアも回収できたので失礼させていただきます」
　回収したコアは指定ポイントに放棄　ちゃんと回収してくれるらしい・・・
　それから情報は束さんがハッキングして情報すべて奪ったし
ヤークトアルケーの機体改造の設計図も送られてきた
　ティエリアに頼んで設計図通りに改造を頼んでからコンビニでクレジットの残金を見ると１２００万入っていた　後日聞いたら１０００万は頭金だったらしい

　また3時間電車に揺られて帰るともう１０時だった
「ただいまー」

「「「「「お帰りなさい　志明（君）（さん）（しーくん）」」」」」
　お怒りムードのみなさんに2時間ほどお説教されて解放されたが夕ご飯はもちろんなく途方に暮れていると…
「志明　おにぎり　作ったから・・・食べる？」

「ありがとうございます」
　そういうと僕は簪が持ってきたおにぎりをほうばった
「志明　今日・・・　どこに　行ってきたの？　お姉ちゃん・・・に聞いても　なにも知らなかった」

「実は今日　織斑先生に連れられて　篠ノ之　束博士のラボに招待されて　そのあと束さんに捕まって　こんな時間に」
　ソレスタルビーングのことはだまっておいたほうが良さそうだし巻き込んでも悪い
「ブリュンヒルデにあの篠ノ之博士！！　どこにいたの？」

「おそらくもう　いませんよ　　それに束さんはほとんどの人間に　興味を持たないようですし…」

「そう……もう遅いし　　お休み　」

「お休みなさい」

「ティエリア　僕はどうしたらいいんだろう？　みんなにソレスタルビーングのことをいうわけにはいかない　　けどこの家にはいずればれる」

「志明、　君がこの家の人のことを大切に思っていることは知っている　だからこそ　違法行為をなくすために戦うべきではないのか？」

「わかってる　　わかってはいるが　それでも怖いんだ　　拒絶されることが」

「（志明……悩め　悩んで答えを出せ）」

長かった一日が終わった

第１１話　ソレスタルビーング始動（後書き）

感想お願いします

第＊＊話　打鉄弐式（前書き）

テスト前でどんどん駄文に・・・

俗に言う過去編です　といってもほんのちょっとだけど

第＊＊話　打鉄弐式

３月１４日

僕は今夕食の準備ができたことを知らせに　地下にあるミニ整備室に　向かっていた

　どうしてこんなとこに来ているかというと　簪さんが　打鉄弐式の開発を入学試験に間に合わせるために急ピッチで　それも睡眠時間を減らしてまでやっていてみんなも心配してやめさせようとしているけどダメらしい

どうしてこんなことになったというと楯無さんが一人でＩＳを作り上げたからだそうだ

　実際は楯無さんのは５０％ぐらいできていてなおかつ虚さんとかに手伝ってもらってたらしいけど　簪さんはそのことを知らない

「簪さん　夕食の準備ができましたよ」

「いらない・・・今は　時間がない・・・」

「　そんなこと言って　体でも壊したら元も子もないですよ
　ですから食事と睡眠はちゃんとってください」

「わかった・・・食べて来る　　でも食べたら・・・また　つくる」

　夕食後　一姫さんが簪さんを強制的にお風呂にいれてるので

～～～～作戦会議中～～～～

「お嬢様　どうしましょう？　　このままじゃ簪さまが倒れられて　入学試験を受けられないかも知れません」

「そうなのよね　　と言って　私が言っても逆効果だしね…」

「のほほんさ～んは　受験べんきょ～で　忙しいのだ～」

「本音！！　、しかし実際問題　私たちが言っても　聞いてもらえないでしょうし」

「ねぇ、　志明君　君は簪ちゃんのことどう思う？　　志明君…？」

「んっ　すみません　　すこし考えことしていたもので　　要するに簪さんには皆さんのことをもっと頼ってほしい　　それでＩＳも完成できたらいい　みたいでいいんですよね？」

「まぁ　そんなことね　どうしたらいいと思う？」

「　少しだけ　僕に預けてもらえませんか？　　部外者に近い僕のほうが客観的に見えそうですし」

「じゃぁ　お願いできるかしら？」

「任せといてください　少しでも結果を出すよう頑張りますよ」

――入浴中の簪さん――

お母さんに無理やり入れられた私は露天風呂で　少し考え事をしていた

最初は　打鉄弐式のことばっかりを考えていたはずなのに今は志明さんのことを考えていた

あの人は突然現れた　　姉さんが突然連れてきた

話を聞いたら姉さんの仕事を邪魔したと思ったら手伝ってくれたみたいなのだが　「帰る場所が無い」　ということで連れてきたらしい

志明さんはなんとＩＳ操縦者で専用機持ちだった　　でも私が恨んでる織斑一夏と違って　メガネが似合っててかっこよく　それにとても優しかった

初対面の私に対して　とても大事なＩＳの情報を簡単に見せてくれた

その時も疲れてるはずなのに３時間も自分のことのように話してくれた

その時本音にからかわれて顔が赤くなった簪はすでに志明に惚れていたのかもしれないがそれを知るのは誰もいない

――再びミニ整備室――

私が整備室に帰ってきたときに志明さんがいた
「どうして・・・いるの？　みんなに・・・言われたから？」
「いえ　別にそういうことではないんですけどね…　どっちにしろ僕はここにくるつもりでしたし」
「どうして・・・？」
「どうしてって　そりゃ簪さんのことが心配だからに決まってるじゃないですか」
「そ　それでにょ・・・志明さんには　関係にゃい」ボンッ
「ふっ　ほら　呂律も回ってないですし　顔も真っ赤ですよ」
「こ　これは・・・あなたのせ「わかってますよ」っつ」
首筋に強い衝撃受けて倒れた私は「すみません」　という声を聞きながら　私の意識は落ちていった

簪さんを落とした僕はお姫様抱っこで　寝室まで運んでいった
「じゃ　あとはお願いしますね虚さん」
「わかりました　志明さんはこれから…？」
「少し　整備室をお借りしてもいいですか？　やりたいことがあ

るので」
「別に御自由に使っていただいて構いません」
「では　朝まで使わせていただきます」

どうして整備室を借りたのかはもちろん理由がある
「ティエリア　　ハロのデータをだしてくれ」
「さっき言われていたからな、　今表示する。　でもいいのか？そう簡単に情報を提供して」
「かまわないよ　　それに簪さんのＩＳの存在はこのあとの物語でる被害の軽減になるしね」

それから僕は　夜中すべてを使って赤ハロとハロを完成させた
　赤ハロは機体などのシステムの補助を考えて作られたが
ハロはソレイユを使わずにティエリアの力を使えるようにした
　簡単にいえばヴェーダの端末のようなものだ　　二つのハロの最終調整を終わらせて　　僕は朝の４時に眠りについた

私は　朝の６時に自分のベットで寝ていたことに気が付いた
「なんで私　ここで寝てるの？」

「ふっ、ふっ、ふっ、　教えてあげようではないか、簪くん」

「本音　探偵・・・みたいな真似してどうしたの？」

「むぅ～　かんちゃんがリアクションとってくれない　「普通どこから！！」　とかするもんだよ」

「じゃぁ・・・どこから？」

「そんなことよりかんちゃん昨日しー君になにしてもらったか覚えてる？」

本音　・・・乗ったんだから反応して……

「昨日？　お風呂はいったあとに整備室で・・・志明さんと会ってそれから……？」

「ふーん　覚えてないんだ　かんちゃん　「なにを？」　それはこれだ」

そういうと本音は写真を取り出した　私が何なのか確かめてア然とした

それは私が志明さんにお姫様抱っこされてる写真だった

「ほ　本音　これって？」

「ん～　それは昨日かんちゃんをしー君が整備室からかんちゃんのお部屋に連れていってた時にとった写真だよ」

「ど　どうして・・・こんなことになってるの？」

「さぁ～　でも大方かんちゃんが整備室で寝ちゃったから　しー君が抱っこしてくれたんじゃない？」

私は　すぐに飛び出して整備室に向かっていた

私が整備室で見たのはたくさんの機材に囲まれながら寝ていた志明さんに　その周りを転がっている二つの球体だった

「起きてる・・・志明さん？」

「んっ　あぁ　おはようございます　簪さん」ファー

「「オハヨウ　オハヨウ」」

「あ・・・おはよう　じゃなくて・・・それは？」

「えーと　ですね　これはハロといって　簡単にいうとＩＳの補助演算装置　ってところです」

「どうして…これを？」

　私はわかりきったことを聞いた

「それは簪さんの助けになると思ったんですが…？」

「いらない…　この子は私一人で…完成させる」

私は意地になって拒絶してしまう　　あんなのとは違って純粋な善意なのに……

「…　それは　どうしてですか？」

「それは・・・姉さんが一人で完成させたのに・・・私ができないなんて・・・」

「そうですか…　　でもひとこと言っていいですか？　　その程度の理由でその子を飛ばせない気ですか？」

「つっ・・・それは　わかってる・・・　　でもそれでも姉さんと比較されるのはもう・・・いやなのぉ・・・」

ポフッ

「えっ「話したくないことを話させてすみませんでした」ナデナデ　ううん「でも　僕は楯無さんと簪さんを比べたことはありませんですし　これからもありません」あっ　　それに楯無さんもほかの人に助けてもらって完成したみたいですよ？」

それって・・・本当？「ええ」　そう・・・なの　　私は姉さんのこと・・・ぜんぜん知らないのね　　志明さんありがとう・・・そのハロ？使わせてもらっても・・・いい？」

「べつにかまいませんが　データはないですよ」

私はもう大丈夫

「大丈夫・・・姉さんに教えてもらう」

「そうですか　じゃ僕はもう一回寝てきます　　あと最後にもう一つ完全な人間なんていませんよ」

「そう　お休み・・・志明」

「お休みなさい　簪」
私が呼び捨てで呼んだら　志明も返してくれた

「赤ハロ・・・姉さんのところに行こう」

「カンザシマッテ　カンザシマッテ」

志明のおかげで入学試験までに打鉄弐式の基本システムが完成することができた　それにお姉ちゃんとの距離も縮まった

これは神田志明と更識簪がこの家で最も深い仲になることの序章である??

第＊＊話　打鉄弐式（後書き）

感想お願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1329y/

IS〈インフィニット・ストラトス〉　超兵でイレギュラー

2011年11月30日17時54分発行